

建築物診断 社会支える

建物などの構造物の内部を調べる技術を駆使し、社会基盤を支える「アイペック」(富山市)。社員の資格取得の推進など、斬新な発想で注目される東出悦子社長(53)が経営の極意を熱く語った。(関泰晴)



△構造物の非破壊検査とはどのようなものですか？

「健康診断で人の体を調べるレントゲンやエコーと同じような機器を使い、建物や施設の内部を点検する。工場、発電所、道路、橋、トンネルなど、あらゆるものが対象だ。例えば、電車の車輪に超音波を当てれば、音波の波形で内

部の傷を把握できる。わざわざ物を壊して中を見なくても『診断』が可能だ。高度成長期の施設は老朽化が進み、検査の重要性が増す。補修法も提案し、業務は幅広い。モノをネットにつなぐIoT技術を導入し、橋などの危険箇所をセンサーで遠方監視する『予防保全』に取り組み。AI画像による交通量の調査システムも手がける」

△アイペックに入社当初は苦勞も多かったのでは？

「若い頃は『富山を出た』と英国留学。米ボストン大でも学び、ニューヨークの会計



社会インフラ事業について話す東出社長(1月17日、富山市中田) 細野登撮影

アイペック(富山市) 東出悦子 社長 53

事務所に勤めた。2000年に帰国して東京の金融機関で働き、不惑を過ぎて社会の役に立ちたいと父の高見貞徳相談役(82)が当時会長が創業者のアイペックに入社した。とはいえ、最初は現場も技術も分からない。『創業家の娘

社員の資格取得支援に工夫

△社長として手応えは？

「毎日の業務で多種多様な検査を行っているが、それぞれに必要な資格は異なる。資格を多く持つ人材が増えればそれが弊社の強みとなる。そこで、ノー残業デーの水曜日の夜に会社で自習すると2000円の手当を出す」という制度を作った。初年度の21年度は資格試験を受ける社員が4倍増の約100人になり、合格率は2割アップの57・4%に達した。それまで社内勉強会を何度も開いてみたが、効果は薄かった。必要なのは仲間と一緒に自習する習慣を持ってもらうことだ」

た。今では事務職の社員も意欲を燃やして技術系の資格を取っている。図面で見ただけだった検査の中身をより深く理解できるようにになり、さらに正確に早く報告書を出せるようになった。連携が強まり、効率も上がった」

△今後の目標は？

「会社が生まれ変わろうと『シン・アイペック』を打ち

が来た」と社内で微妙な空気が広がる中、『自分のできることをやろう』と心に決めた。旧態依然の会議進行の改善に着手し、もっと意欲を持って健康に働ける職場の構築を目指すなど、会社には足りないところを補おうと取り組んだ」

△改革への反響は？

「父はトッパダウンで物事を決めるタイプ。一方、自分にはみんな力を合わせよう」とポトムアップを進めたいと考えた。真逆なうえ、お互い出している。このうちの柱の一つは、『自分ブランド』の確立だ。お客様に『あの人に頼みたい』と、指名をいただけるような人材を育てたい。現場の仕事を着実に進めるだけではなく、的確な提案もできる『プラスワン活動』にも力を入れている。大切なのは、社内外での信頼関係を大切に仕事をする事だ。どんな小さなことでもおろそかにしない『凡事徹底』ができる会社にした」

に譲らない性格なので、会議中に意見が合わなくて口論になり、家でも会話が減って気まずい時期もあった。いま振り返っても恥ずかしいばかりの社内公開の『親子ゲンカ』だったが、社員の幸せ、社会への貢献を両立させる——という経営理念の根幹は共有していた。『ただ、理念の実現に向けての手法が違っただけ』と気づいて父の意見に耳を傾けるようになり、歩み寄るまでに1年以上かかった」

◆アイペック 1976年創業。建物や設備などの非破壊検査、調査診断を中心に顧客数は400社超。社員70人。オフィスで各社員が使う机を固定しない「フリーアドレス」、通勤時間削減を目指す「直行・直帰」の導入など、ユニークな改革でも注目を集める。

周囲の人物評は「努力を惜しまない勉強家」。米国での留学・生活は計10年に及んだが、最も好きなのはやはり、故郷の富山という。「県外や海外に出て、もう一度、大きい目で見ると、富山の本当の良さが分かった。でも、保守的な部分もあり、変わるべきところを変えていくことで、より豊かな社会になる」と語る。

趣味は温泉、グルメ、登山、ダンス、読書、散歩、音楽、お花などと多彩だ。多感な10代はプリティッシュロックに夢中だったが、最近の「推し」は、日本のロックバンド「くるり」という。「オペラやピアノなども好き。たまにオーバード・ホールでの公演も見に行く」と話す。

趣味多彩推しは「くるり」